第４号様式（第８条関係）

議　事　録

会議名	寒川町史編集委員会		
日　時	令和７年８月６日(水)10:00～12:00	開催形態	公開
場　所	寒川町役場議会第１会議室		
出席者	委員：内海委員、松岡委員 事務局：伊藤館長、平尾主査、高木主任主事 傍聴者：なし		
議　題	(１)議事録承認委員の選出 (２)『寒川町史研究』第 37 号の誌面構成および刊行スケジュール (３)『寒川町史研究』の刊行計画について (４)その他		
決定事項	(１)議事録承認委員に松岡委員が選出された。 (２)新旧町史編集委員による座談会を開き、町史研究に掲載することが確認された。また、学校日誌関連の２本の記事を統合するよう意見が出された。 (３)寒川町史研究の隔年刊行について協議したが、調査報告書のあり方も含め、結論は次回以降に持ち越しとなった。		
議　　事	**（１）議事録承認委員の選出** 松岡委員が選出された。 **（２）『寒川町史研究』第 37 号の誌面構成および刊行スケジュール** 資料１について事務局案を説明したところ、次のような意見があった。 （委　員）　このほど圭室先生をはじめ町史編さん事業の当初から牽引されてきた先生方がお辞めになり、刊行事業のありかたも転機を迎えているので、過去を振り返り将来への展望を語る座談会を実施し、誌面に残すことを提案したい。 　圭室先生は児玉先生とともに、町史編さん事業の準備の段階から深く関わっていらっしゃるので、その詳細を記録に残すのは大変意義のあることだ。寒川町ほどの人口規模でこれだけの編さん事業を実施できたことの意味を検証すべきである。他の委員のご経験も重要なので、もし座談会当日の参加がかなわなくても、誌面参加という形で参画していただければと思う。次回の編集委員会は 11 月の予定とのことなので、その会議の終了後に開催してはどうか。その後の編集作業が間に合えば次の 37 号に掲載していただきたいが、スケジュールが難しければその次の号に載せる形でも構わない。この機を逃すと話を伺うことができなくなる恐れもあるので、座談会だけは急いで行う必要がある。		

	松岡委員は町史編集協力員という形で、町史事業の初期から調査や執筆に尽力された。編集委員以外の視点で町史事業を振り返るという機会は今までなかったので、その経験もまた大変貴重である。ぜひ座談会に加わっていただきたい。 （委　員）　一度は記録しておかないと町史の意義が薄れてしまう恐れもあるので、インタビューを掲載することは良い考えだと思うが、37 号の誌面は配付資料のとおり、ある程度固まっているのではないのか。 （事務局）　事務局案としては配布資料の通りであるが、本日ご議論いただいた上で決定するものである。 （委　員）　差し替えや追加が可能なのであれば、このインタビューを 37 号に掲載することはとても良い案だと思う。 （事務局）　スケジュール的にどうなのかを検討する必要はある。これまでの町史研究を見返すと、座談会は創刊号、12 号、16 号にあり、文書館開館記念誌にも載せていて、その都度、それぞれの時点での総括や今後の方向性のようなものを出していただいている。今回は違う視点で実施するということでよろしいか。そうするとまずすべき作業は、旧編集委員にご賛同いただけるかを確認することになるのか。 （委　員）　こちらでこういう企画をしたので参加していただけないかという依頼になる。圭室先生は当初は副委員長、のちに委員長を歴任され、準備段階から重要な役割を果たしたので、そのご経験を記録することが中心となるが、それぞれの分野ごとの振り返りも必要なので、直前にお辞めになった旧委員にも加わっていただきたい。特に考古の鈴木先生は木村先生から引き継いで編集委員に就任なさったので、これまでの座談会には参加していない。しかし、考古編の執筆や編集の実務において当初から重要な部分を担った方なので、松岡委員と同じように編集委員を支える立場としてのご経験を話していただけるとありがたい。 （事務局）　今年度に座談会を開催することは厳しいという印象を持っている。まず、旧委員をお呼びする交通費の予算がないという点である。また、11 月中に座談会を開くと、そこからまとめに入るので、37 号に載せるにはスケジュール的に難しいのではないか。 （委　員）　編集委員会と座談会の開催を 10 月に前倒しすれば、スケジュールの問題は解決するかもしれない。 （委　員）　早期開催にこだわっているのは、参加をお願いしたい旧委員がご高齢であるということである。いっぽう事務処理の上で無理があるという事務局の立場もわかる。うまい落としどころがあると良いのだが。 （委　員）　予算はともかく今年度中に座談会を実施する必要がある。交通費の問題については出席をお願いする旧委員には申し訳ないが、一番大切なことは記録を残しておくことである。

	（委　員）　座談会を過去に４回実施したという説明があったが、児玉先生が出席なさったのは創刊号だけか。 （事務局）　12 号と 16 号にも参加していただいている。 （委　員）　座談会を実施し、その記録を町史研究に反映させるという方向だけ確認したい。掲載号が 37 号なのかそれ以降なのかは別にして、ぜひやっておくべきことである。予算のことは事務局にお願いするほかない。 （事務局）　もし今年度に実施するなら、各参加者にご了解を得て手弁当でお越しいただくしかない。 （委　員）　自分としては手弁当でもやむを得ないと思う。旧委員にはご理解いただいて、とにかく今年度中に実施したい。 （事務局）　もう一度今回の座談会の狙いを確認させていただきたい。町史編さん事業の当事者として旧委員に語っていただき、その記録を残すというということでよろしいか。 （委　員）　それもあるが、コロナ禍で書面会議になっていくなかで、任期の問題もあって辞めざるを得なかったという経緯がある。そうした旧委員に、町史というのはこういうものなのだと語っていただくことにより、また新たな視点が見えてくる可能性がある。以前の座談会の内容と多少は重なるところがあるかもしれないが、決して無駄なのではなく、旧委員の経験や考え方を後世に伝えることこそ大事なのである。 （事務局）　圭室先生のご自宅に何度か伺い、今後のことをご相談したおりに、これからの方向性は新しい委員で決めていってほしいというお話をいただいている。この座談会の着地点が今後の文書館のあり方を考えるということであれば、圭室先生の意に沿わないと思うが。 （委　員）　ただ過去のことを振り返らないと課題も見えてこない。これまでの経緯から積み残したことを把握することで、編さん事業のあり方など今後の展望も見えてくるのではないか。実は圭室先生には内々にお願いしているのだが、委員会で正式決定を経た上で実施したいと、本日提案した次第である。 （事務局）　松岡委員も趣旨は了解ということでよろしいか。そうであれば、次に決めるのは、座談会をどのタイミングで開くのかということと、どの誌面に載せるのかということになる。そこで一つの腹案だが、37 号の発行を 1 年ずらすということも考えられる。重要な内容なのでじっくり時間をかけて編集するために刊行を令和８年度に回すということである。 （委　員）　過去に掲載した座談会を編集するにあっては、実際にはどのくらいの時間がかかっているのか。 （事務局）　12 号に掲載した座談会の開催は前年の８月、16 号の場合は７月と、年度末の刊行までに半年以上かかっている。

	（委　員）　ならばなおのこと、座談会は早めに実施する必要がある。ただ、どの誌面に掲載するかは様子をみて決定することとしたい。 （事務局）　座談会を開催することについて、現委員お二人のご意向は確認できたが、次のステップはご参加いただく旧委員の賛同をいただくことになるか。 （委　員）　座談会のセッティングは事務局にお願いしたい。 （事務局）　編集委員会の席上、現委員のご提案により座談会開催が決まったので、予算がなくてもお越しいただくことが可能でしょうかと尋ねることになる。それでは乱暴だと受けとめられてしまう懸念もあるが、事務局に一任ということであれば、ご無礼を承知で依頼するしかない。ただ、事務局が勝手に決めたのではなく、編集委員会のお名前を前面に出すことになる。依頼文の発信者は内海委員長となるが、了承していただきたい。直近で退任された圭室先生、鳥養先生、大口先生、鈴木先生に座談会開催の旨の通知を送り、ご賛同いただけるかの回答をいただき、ご出席いただける方とスケジュール調整をして今秋に実施する、という流れでよろしいか。また掲載先については、町史研究 37 号なのか、それ以降の号になるのかは、状況をみて考えるということでよろしいか。 （委　員）　調整をする際、寒川に来られない場合でも誌面参加なら可能かどうかも確認してほしい。 （事務局）　誌面参加する場合、具体的なテーマを示しておかないと旧委員も執筆できないのではないか。 （委　員）　今までの編集委員としての経験と、これからの展望ということをお願いしたい。 （委　員）　資料１の誌面構成案を見ると、１番の学校日誌の資料紹介と４番の展示記録は同じ素材を使ったものなので、分ける必要がないと思う。資料紹介も抄録ではなく全文を掲載することが望ましい。調査報告書は何年も出ていないので、その扱いも議論しなければならないのだが、37 号に収めるならば、１番と４番は一緒にすべきだ。 （事務局）　資料紹介と展示記録を統合する方向で検討する。ただし、学校日誌全７冊をすべて載せることは、町史研究の誌面では限界があるので、展示に使用した部分を中心に抄録したい。 （委　員）　刊行物は町史編集委員会のもとで決めるもので、担当者の意見だけが反映されるものではない。分量の多い資料は調査報告書で翻刻してきたのがこれまでのスタイルなので、その兼ね合いもまだ議論しなければならない。 （事務局）　町史研究は、調査・研究の成果を町民に還元するという役割がある。今回の展示は、国民学校の日誌から戦争に関する記事を抜き出して紹介するものだが、学校日誌の全体像を示した方が良いというご意見か。

	（委　員）　資料紹介に統合するのではなく、展示記録に統合して、今回は引用部分を翻刻する形がよいのではないか。国民学校の日誌は部分的に紹介して終わりではなく、全体像がわかるようなまとめ方をしたほうが良い。そこで出てくるのが調査報告書のあり方だ。寒川神社日誌の翻刻も途中で止まっているし、町長の所信表明・施政方針をまとめた報告書も刊行の途中であるが、それらをどうするかという議論はまだできていない。とりあえず今回は展示記録をメインにして、資料紹介は別の機会に検討してはどうか。その原稿の中で、資料の概要については触れてほしい。 （事務局）　展示記録のなかで触れるようにする。 （委　員）　青年学校のインタビューはぜひ載せてほしいが、補足できる資料はあるのか。 （事務局）　辞令など中島良さん自身が残した資料が若干あるのと、町の公文書に青年学校沿革誌があるので参考にできる。 （委　員）　中島さんの顔写真はあるのか。 （事務局）　青年学校当時の写真はないが、寒川小学校長を務めた時の肖像写真ならある。 **（３）『寒川町史研究』の刊行計画について** 資料２について事務局案を説明したところ、次のような意見があった。 （委　員）　町史研究の隔年刊行という提案があったが、なぜ隔年が良いのかという説明にあまり説得力がないように感じた。ご存知のように町史編集委員会はここ何年も年に１回しか開催されてこなかった。私たち委員の意向ではなく町側の都合で１回になったために、十分な議論をする時間がなくなってしまった。旧委員長もいつも気にしておられたが、その総括がまだなされていない。隔年刊行は自分たちの力がないから刊行計画を変更したいという都合の良い提案にしか受け取れない。さらに、調査報告書が何年も出ていないなか、その兼ね合いも考えなければならないのに、町史研究の隔年刊行のことしか提案がない。こうしたことから、結論は急がず、あるべき姿をもっとじっくり練ったほうがよいと思う。 （事務局）　会議の開催回数が減ったことと町史研究の隔年刊行とがどう結びつくのか説明をお願いしたい。 （委　員）　会議が減ったことについての経緯は説明できるか。 （事務局）　平成 29 年度から年１回の開催となった。前年の予算編成では従来どおり年２回で要求したが、査定の結果１回となった。その結果をただちに編集委員に報告せずに平成 29 年度の会議を迎えてしまった。この点は反省している。 （委　員）　旧委員長はその事態を受け、何度も複数開催とするよう発言されていたが、とうとう退任されるまで実現できなかった。そうした中で出てきたのが

	町史研究の隔年刊行案である。事務局の体制や、調査報告書の刊行が止まってしまったことが総轄されない中で、町史研究のあり方だけを変えようということには疑問を抱かざるを得ないし、もっと議論を重ねたほうがよいと思う。たとえば、町史研究を隔年にする代わりに、出さない年は調査報告書を出すという妥協案も考えられる。予算の観点で事務局の考えはどうか。 （事務局）　予算を組むにあたっては、前年度に比べて増やす場合も減らす場合も説明が求められるが、説明を尽くせば必ず獲得できるというものではない。今回、会議の開催については回数を増やすことができた。いっぽう文書館として優先すべき課題として、公文書に関する問題がある。かなり前から課題として挙げられながらなかなか前に進めることができていなかったものである。これをしっかり実行しつつ、町史研究の刊行も行うことができるようにするため、隔年刊行を提案した次第である。２年間で４回開くことのできるようになった編集委員会でしっかり内容を議論して、充実したものを刊行することができると考えている。ただこれは一つの案として出させていただいたもので、本日決定しなければならないというものではない。 （委　員）　業務的に毎年刊行することが難しくなってきたというのは理解できたが、予算削減が起こりそうだということも見越しての対応なのか。 （事務局）　業務の現状を分析したうえで提案させていただいた。 （委　員）　かつては町史研究と調査報告書を並行して出してきたが、調査報告書については企画が通ったときに予算を付けて刊行したということか。 （事務局）　調査報告書については、途中から予算がつかず、直近の５冊ほどは庁内印刷で出してきた。町史研究は２年ほど予算がつかない年があり、うち１回は庁内印刷で出したが、その後は毎年予算がついている。 （委　員）　予算の削減状況はこれまで編集委員会であまり説明がなかった。さきほど町史研究と調査報告書を１冊ずつ交互に出すという妥協案を申し上げたが、予算の状況からすればこれが可能だということがわかった。ただ、本を編集するには作業の人員が必要だ。その人数も減っているのではないか。 （事務局）　現在は資料取扱専門員という会計年度任用職員が２名いる。従来の臨時職員に比べ人数は減ったが、勤務日数は増えている。 （委　員）　勤務日数が増えているのであれば、より刊行物を出しやすくなったのではないか。 （事務局）　資料２にあるように、現在の業務課題として、公文書の管理にかかる問題がある。これまで普及事業や町史編さん事業に注力していたが、方向転換をしなければならないと考えている。 （委　員）　公文書管理の業務は、2025 年度だけ忙しいというわけではなく、将来的に続いていくということか。

	（事務局）　2025 年度は資料２に示したとおり、有期限文書の選別基準の策定や、電子公文書への対応などがある。その先も、選別収集している文書の目録整備など、課題は山積している。 （委　員）　そのあたりをもう少し丁寧に説明していただけると、具体的な議論をすることができるのではないか。 （事務局）お二人の委員からご意見をいただいた。これらを整理して再度提案させていただければと思う。 **（４）その他** 〇相模海軍工廠関係の資料調査の進捗状況について報告した。
資　　料	資料１　『寒川町史研究』第 37 号の誌面構成および刊行スケジュール 資料２　『寒川町史研究』の刊行計画について 参考資料　相模海軍工廠関係資料の動向

議事録承認委員及び議事録確定年月日	松　岡　　俊 （令和７年９月 17 日確定）